

天声人語

夏目漱石の小説『三四郎』の出だしは、何度読んでもどきどきする。帝国大学に入るためには東京へ向かう三四郎が、汽車で女性と知り合う。二人はふとしたことから、同じ宿の同じ部屋に泊まることになる▼部屋に一つだけある蚊帳がいい味を出していて、そこに女性と一緒に入るべきかどうか、三四郎は逡巡するのだ。そう、季節は夏。明治期の大学は西洋にない、9月が学年の始まりだった。入学した三四郎が銀杏並木を眺める場面もある▼そう考えると、あなたがちとつびとは言えない話である。感染拡大で授業が止まるなか、いっそ全ての学校の始業を9月に変えてはどうか。そんな提案が高校生から出て、広がりを見せている▼遠隔授業の質は学校によってばらつきがあり、受験を考えると不公平だというのが理由だ。9月始業を求める声は以前からあり、受験が雪に邪魔されない、留学しやすいなどの利点も言われる。感染収束の行方をにらみつつ、真剣に検討すべき案であろう▼大きな転換をもたらす出来事を「ゲームチエンジャー」という。コロナ危機はその最たるものかもしれない。社会への影響が避けられないなら、よりよい方向へ。学校制度に限らず、多くの分野で議論がなされたい▼実は今の始業時期は、旧日本軍の徴兵制に関わりがある。徴兵対象者の届け出の時期が9月から4月に変わり、徴兵猶予の資格を学生が得やすいようになると4月入学が広がっていった。仕組みはときに外からのショックで変わる。